

カウンセリングとコンサルテーション

辻 村 英 夫

子どもの教育的問題の解決のためには、子どものみならず、親および幼児教育・学校教育にたずさわる教育者への心理的支援と援助が必要である。

昨今の子どもの問題には親・教育者の側の精神的ケアの有無に根ざすものが少なくない。問題に直面して子ども自身はもちろんのこと、親・教育者はなぜこのような状態・状況になったのか、どうすれば克服することができるかに悩み自問する。問題解決には、神経症レベルの対象者にはカウンセリング (counseling) が有効だと思われるが、それ以前の段階の対象者にはカウンセラー (counselor) のガイダンス (guidance) とコンサルテーション (consultation) が必要である。幼稚園や学校における対象者は病院臨床に比して問題からの回復力・復元力がある場合が多い。ガイダンスによって問題解決への道筋を示されることもあるし、コンサルテーションによるカウンセラーの“ひと言”のアドバイスが一瞬に問題解決に導くこともある。しかし、いずれにしてもカウンセリング・マインドがそれらのベースにあることは不可欠である。本論文では、依り処を失い解決の糸口のない教育的問題をもつ対象者が、いかにしてカウンセリング、ガイダンス、コンサルテーションによって問題を解決していくか、特に幼稚園や学校におけるコンサルテーションの重要性を強調したい。

【キーワード；コンサルテーション、カウンセリング・マインド、ガイダンス、教育相談、問題解決】

はじめに

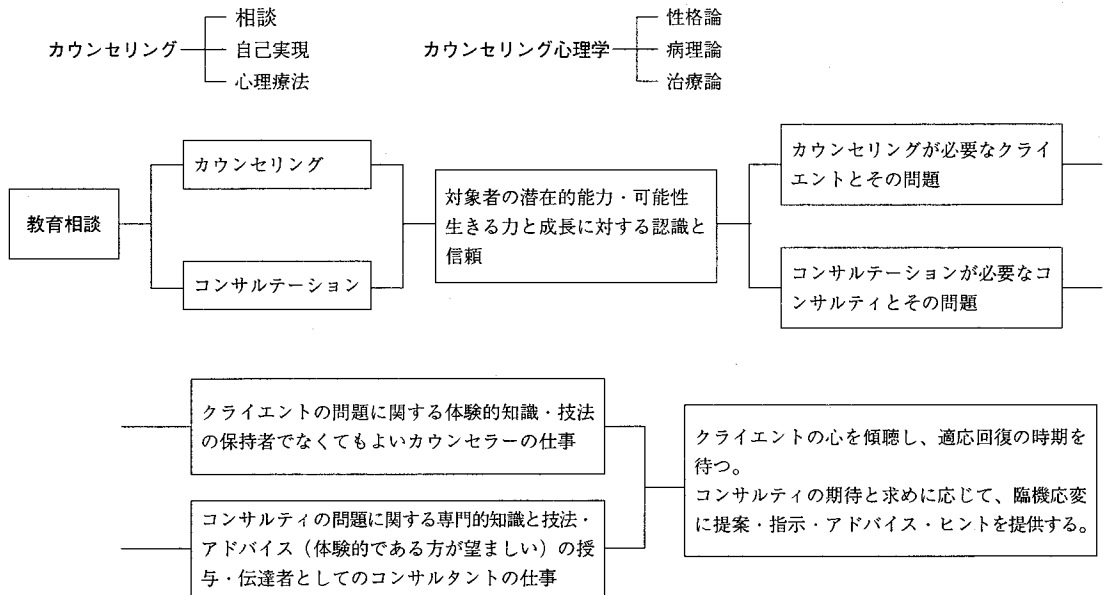
教育相談活動においてはカウンセリング (counseling) とコンサルテーション (consultation) の選択場面にしばしば遭遇する。このことは病院臨床よりも学校における生徒指導や教育相談において一層顕著である。お互いの信頼関係に基づいて、対象者の潜在的な能力や可能性、全体的な生きる力と成長を信じ、それらの開発と伸長を目指すという点ではカウンセリングとコンサルテーションには共通性があるとはいうものの、両者の使い分けと活用は時と場合、そしてケースに応じて区別されなければならない。つまり対象者と問題に応じてカウンセリングとコンサルテーションのどちらでアプローチするのがよいか、あるいは一つのケースの中で時宜に応じたスイッチといったことが必要となる。しかしながら、いずれの場合でも、その基本はカウンセリングの理念にかなっていることが大切である。本稿ではスクールカウンセラーとしての体験を踏まえて、学校における教育相談場面でのカウンセリングとコンサルテーションについて論述する。

[1] カウンセリングの特徴とコンサルテーションの応用

カウンセリングとは、心の悩みや葛藤・不安・障害

などをもつクライアント (client=来談者) とカウンセラーとの、話し合いによって治療や援助を行う相談関係のことをいう。相談のほかには、クライアントの自己実現を目標とするものと、心理的治療を必要とする心理療法のひとつとして行われるものがある。そしてカウンセリング心理学は性格論、病理論、治療論の3つの柱から成り立っている。

カウンセリングでは中心をクライアントに据え、オープンな心でクライアントの心の声を傾聴し、効果をあせらず適応回復の時期を待つ。カウンセラーとクライアントは時間を共有し共に生きる「問題解決の旅に出る同行者」である。カウンセリングでは、主として提案や支持・指導あるいはアドバイスが、全面に出ないのが普通であり、むしろクライアントの気づきによってクライアント自身に問題解決がもたらされることを期待する。ところがコンサルテーションでは、コンサルティの期待と求めに応じて提案・指示・アドバイスを提供しなければならない。さもなければ相談活動が進展しない。つまりコンサルテーションでは知識・情報・技術・戦略・技法・方法・提案・アドバイスを対象者に伝え授与するという側面が強く、コンサルティ自身もそれを求めている。問題は、いつ、どのように、そしてどんな場合にカウンセリングとコンサルテーションの選択とスイッチをするかであろう。それは学校コ



ンサルテーションには、指示的カウンセリングとは異なった側面が多くあるからである。

ここで、カウンセリングとコンサルテーションの相異点を明らかにしておく必要がある。カウンセリング (counseling) の語源の元はラテン語で、後にアングロサクソン語の *consilium* となり、*con* は「共に」、*silium* は「とること」の意から「相談」の意になった。つまり一緒に問題・思い・悩み・困難をとることである。従って、カウンセリングは相談・協議のことで、カウンセラー (counselor) は相談相手・助言者の意となる。一方コンサルテーション (consultation) は (専門家との) 相談・協議・諮問を意味する。つまりコンサルト (consult) とは (権威、資格のある人などに) 助言 (指導・意見・情報など) を求める「相談する」の意である。その基本は「特定の専門性を持った専門職の人が、職業上の必要性から他の専門職の人に相談すること」である。語源はラテン語 *consultare* より *con* は「共に」、*sedere* 「座る」から、共に座り議する意味となる。このように *counsel* が共に、一緒になって共通の問題解決に向かうのに対して、*consult* では共に座して、一方の専門家から他方の問題をもった人に、専門的な知識や情報を得させるといった意味となる。学校コンサルテーションでは、コンサルティとしての教師に対して、生徒の問題によりよく対処できるように、専門性をもつスクールカウンセラーがコンサルタントとして支援・援助することであるし、また、親が子どもに対してよりよい養育、教育をおこなうに当たっての、いわゆる「親業」に対

する知識・情報・提案・アドバイスの伝達・授与者ということになる。そして児童・生徒に対しては、子どもの心の迷いを解き、心を平穏にし、癒しをもたらすスクールカウンセラーからのアドバイスやヒントといった一言が大切となる。教師や親に対するコンサルテーションとは違った意味合いが子どもにはある。しかし、子どもはたとえ何の専門家ではないにしても「子どもを生きる」「児童・生徒として生活する」点では独特でユニークな時期の人間である。従って、コンサルタントも「その時代と時期を生きる」技能と熟達が求められるのではない。故に学校における児童・生徒に対しても、コンサルテーションは成り立つものと考えるのである。教師は専門職として職務を遂行する過程において自らの専門性をもってしても、なお解決できない問題が生起する。そうした時教師は迷い悩むが故にスクールカウンセラーに解決を依頼しなければならないことがある。その際スクールカウンセラーは教師の問題解決を支援し、援助するためのアドバイスなりサジェッション・ヒントといった解決方法を具体的に提示する。親に対するコンサルテーションも同様である。親も最もよく理解しているはずの子どもの気持ちが分からなくなり、子どもの育て方なり教育方法の提示をスクールカウンセラーに求める場合がある。こうした場合は、コンサルティの要求や期待に真にマッチするアドバイスや問題解決の方法や戦略の、具体的にタイムリーな提示が必要となる。要するに、教師や親の専門性に一層磨きをかけるプロセスを、共に体験することがコンサルテーションなのである。しかしなが

ら、親や教師がその任務なり義務を遺憾なく遂行するためには、まず親や教師自身の問題が解決されていなければならない。そのための知識・情報・アドバイス・提案・ヒントを与えられることで迷いがとけ、問題解決を容易にする。しかるのちに、子どもの問題が解決され教育が円滑になされるのである。

〔2〕子どもに対する教育相談

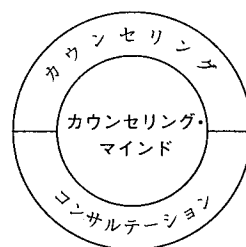
スクールカウンセラーとして受ける相談内容として、生徒からは「友達との関係」「教師との関係」「学校・学級との関わり」「家族関係（家族の相互関係・親との関係・父母の関係）」そして親からは「子育て・子供の教育」「家族関係・夫婦関係」「教師や学校のこと」「親同士の関係」、また教師からは「生徒指導」「親との関係・親指導」「同僚との関係」………といったものが多い。一般に、スクールカウンセリング場面での生徒の問題は一過性で、生徒自身も健康で復元力・回復力が強い。この点は病院臨床とはかなり異なる。しかし生徒からの相談を受ける場合、カウンセリングが必要な場合とコンサルテーションが必要な場合の見分け方は難しく、慎重になさねばならない。

教師が教育指導をする場合、生徒の問題行動および、そこまで至らない生徒の言動に対しても「良い・悪い」で指導しがちである。ところがカウンセリング・マインドでは「なぜ、そうした言動に至ったか」に精神的エネルギーを注ぐ。また、教師の指導に対する生徒の反応に対しては「言葉に反応するのではなく、心の声に傾聴する」のがカウンセリング・マインドである。従って、カウンセリング・マインドをベースにした生徒指導をするには、ケースに応じ時宜を得たカウンセリングとコンサルテーションのスイッチが必要である。表面的には何の問題もなく、よく適応しているとみえる生徒でも、よく観察すると過剰適応であったり、抑圧されたりベンジの心（恨み心）を秘めていたりする。そうした場合のスクールカウンセラーによるタイミングのよいアドバイスや指示・指導が、生徒を目覚めさせるものである。

例えば、ある中学生は友達からの「いじめ」と「いやがらせ」にあり、カウンセラーのアドバイス、指示、提案、ヒント、解決方法の具体的提示による生徒自身の実行で問題解決した。また、進路指導に関する担任教師の生徒に対する対応のまずさと指導力の欠如に関する生徒の側からの苦情と相談でも、カウンセラーから担任への守秘義務を踏まえての直接的で具体的なアドバイスによって、担任が気づき解決された。これらはコンサルテーションの分野といえよう。しかし一方、父母のコミュニケーションのなさに対する生徒の悩み相談では、神経症症状を呈していた生徒には、ひたす

ら聞くことと適応回復の時期を待つことで心が癒され、回復過程で生徒がアドバイスを求めてきた時に適切な指示・助言を与えることで元気になった例がある。カウンセリングとコンサルテーションのスイッチということであろう。解決を急ぐあまり、指示やアドバイスを提示し無理に生徒を変えようとした場合失敗する。根本的には生徒の心をどれほど理解するかであるが、それにはまず発達をふまえた子どもの心の理解が大切である。

スクールカウンセラーの基本的資質として必要なことは、(1)子どもの心の動きに敏感である、(2)子どものいうことに全身全霊を傾け、よく聴く、(3)子どもの精神的生命力を信じ、成長への可能性と潜在力をもっていることを認識する、(4)子どものみならず、全ての人間が成長することに対する信頼と信念をもつ………ことである。



すなわち、生徒の感じている気持と心にどれだけ近づけ一致できるか、いかに生徒のつらい気持ちを理解できるかが勝負になると思う。このことは教育相談以外の教科指導の面でも「生徒の分からないところが分かる指導」が大切なと同じである。いずれにしても、指導者のバックグラウンドや雰囲気といったものも大切となる。要するに、カウンセリングとコンサルテーションの双方の補い合いがあってこそ、生徒の心底まで届き癒しがもたらされ、活力が生みだされる。スクールカウンセラーは、生徒—教師、教師—保護者、保護者—子ども、の関係と心理について熟知し、その問題発生に至る道筋を理解することが肝要である。従って、真に生徒の問題を解決するには「人間についての深い理解」を基礎にしつつ、学校組織と教師の心理の理解さらには教職の体験的認識があれば理想的である。対象者の人間関係の中での力動性について把握し、さらには家庭における父性と母性の発揮等の家族の相互作用を深く知ることによって、はじめてカウンセリングとコンサルテーションが生かされてくる。コンサルテーションといえば、教師・親対象がまず考えられるが、生徒・子どもに対しても生徒として、そして人間としてのコンサルテーションがあって然るべきである。対象の子どもの成長と発達、そして人格形成のプロセス

について熟知してはじめてカウンセリングとコンサルテーションが生かされる。どれほど生徒の立場に立ち得るか、そしてカウンセリングとコンサルテーションをいかに臨機応変に実施できるかということである。

〔3〕親の視点と子どもの問題

教育相談では、とかく是非・正誤で判断したり、その問題発生の経路と原因を追求しがちである。しかし実際には、こういったあり方では問題は解決しない。そうした場合、親（教師も）は「好き・嫌い」の感情や価値観に影響されたり、問題や子どもをみる視点が一面的になっていることが多い。従って、コンサルテーションにより、親が自分の子どもの問題をみる視点を広げることが肝要である。視点を多面的にしたり立体的にすることで、必然的に子どもの心身の不全と不調は改善される。子ども－親－教師の連係の中で、親が教師の視点が広がることで、子どもは失われた生活と生活体のリズムとペースとバランスを再度取り戻すことができるのである。このことは子どもをとりまく家族の誰かの視点が変化することでも同様の現象が起きる。いわゆる家族療法におけるシステムズアプローチである。また『時間』についての親に対するコンサルテーションも大切である。家庭における子どもの時間の進み方が、家族の成員の時間の進み方と違って、さらに朝になると学校時間に子どもが合わせなければならない重圧に押しつぶされそうになる。家族の成員の時間に対する意識と行動がバラバラで、ある家庭では家族全員で団らん的な時間をもてるようにコンサルトする。家族全員で描画をすとか、共通の娯楽や一つの作業を家族で一致協力してすることをアドバイスするなどである。親がそのことに気づき、家族が共同・共通の時間を持ち、子どもが学校時間に適応できるとき、不登校や学業不振などの教育問題が解消されることが多い。これらは技法としてのコンサルテーションである。しかし大切なことは、コンサルテーションの際どれほど親の心に一致でき、親の立場に立てるかがベースになれば、単なる『正しいこと・良いこと・すべきこと』の提示と伝達になりコンサルテーションにはならない。

親からの相談は親としてどう対処すべきかのコンサルテーションを求めているものが多い。ある不登校生の親は、子供の問題でスクールカウンセラーのところに来ておられたが、非支持的方法のカウンセラーに対しては、すぐさま拒否的態度を示され「どうすればよいか分からないから、こうして来ているのです」と率直に言われた。ということは、ノンディレクティブなカウンセリングではなくコンサルテーションを求めていることになる。こうなると十分納得のいくようにコ

ンサルテーションをすぐさま実施しなければならない。このケースの場合、父母のパワー関係からくるコミュニケーション不足と父親の子供に対する父性機能の不全さが目立ち、子供の教育・養育に関する父母の養育態度・教育方針の不一致があった。毎回のセッションで、母親は来談するなり筆記用具を取り出し、スクールカウンセラーのコンサルテーション事項を逐一メモした。そしてスクールカウンセラーが母親から、それまでにあった家庭内でのエピソードを聞く過程で「スクールカウンセラーならどうしますか」と求められる発言が目立った。母親とスクールカウンセラーが一致することもあったし、また全く食い違うことも少なくなかった。コンサルテーションによって母親は自己を振り返り、自問自答と自己洞察の末、夫婦関係を調整改善していかれたようである。このような場合も、スクールカウンセラーは体験に裏づけられた明確な知識と情報・技法・方法が求められる。そうでなければ母親は納得しない。母親はスクールカウンセラーによる承認と拒否により、自らの発想の転換と認知と心のあるり方の変更を迫られることになった。こうして徐々にではあるが、父母のコミュニケーションは深まり、子供の症状は軽減され、問題が解決されていった。また別の「友人関係がうまくいかない生徒」の場合、母親自身が自分の父親（子供の祖父）との情緒的一体感が強く、さらに問題のある生徒とも同様に心理的同一性が顕著であった。祖父の情緒的反応は、たちどころに母親と孫の生徒に波及し、母子共被害者意識が強かった。母親が腹を立てれば子供も怒り、悲しい時には同じ反応をした。指示やアドバイスには極度に拒否的否定的態度を示し、情緒的パニックにすらなることがあった。このようなケースではコンサルテーションは効を奏することはなく、カウンセリングにより「気づき」の時を待たねばならなかった。祖父のパワフルのために、母親は持ち前の機能を発揮し得ず、子供もまた一体感の中に飲み込まれていた。つまりコンサルテーションに対しては抵抗し、過剰な反応は効果を減ずるか、問題をさきおくりさせた。こうみると、コンサルテーションは弁護士による法律相談や栄養士による栄養指導とも、かなりの点で共通する部分があると思われる。

〔4〕学校教育の理解と教師コンサルテーション

教師に対するコンサルテーションを実施するに際しては、まず「学校教育と教職についての理解」が大変重要である。学校教育について知らない者、あるいは学校教育の中心に自らが入る気のない者が、教師コンサルテーションが果たして可能なのかといった疑義が現場にないわけではない。カウンセリング・ルームに

教師の方から相談にこられる場合、あるいは職員室や廊下のような出会いの場所、また生活指導委員会や不登校対策委員会の委員として参加する場合でのコンサルテーション、そして校長などの管理職や生活指導主事が窓口となる相談と他校の教師から持ち込まれるコンサルテーションの申し込みなどが学校に派遣されるスクールカウンセラーにはある。いずれの場合でも「教職についての深い理解」があって、はじめて教師の相談に心底届き納得のできるコンサルテーションが可能となる。「学校教育全般について」「校務分掌」「教科指導と教科外指導」「教科担任と学級担任教師の心理」「生徒指導と生活指導」「教師-生徒-保護者関係の心理」などについての深い認識と理解と洞察が必要である。従って、教職経験の十分な人が必ずしも良い教師コンサルタンต์であるとは限らないし、他方臨床心理学的知見の豊富な人でも学校教育に疎いスクールカウンセラーは、現場の教師に合点と納得のいくコンサルテーションを実施することは難しい。それは教職経験の豊かな人がしばしば指示的になりすぎるきらいがあったり、他方学校教育の経験の乏しいスクールカウンセラーが教師の本当に困っていることが解らないことがあるからである。前者にはカウンセリング・マインドが不足していることがあるし、後者にはコンサルテーションの内容が乏しいからに外ならない。

教師からの相談内容でのコンサルテーションの占める割合は案外大きい。ある学年主任の教師は「学年の教師達の最大限の協力を得るにはどうすればよいか」といった内容であったし、又別の教師は「日ごろ教室に入らず、授業ボイコットしている生徒が、学校行事のスキー合宿に参加することの是非」についての相談であった。これらの助言・アドバイスの要求は、教師を納得させる具体的・直接的、的確なものでなければならぬ。従って、精神病理的な面に力点を置いた精神医学的・臨床心理学的知識技法の授与や非指示的カウンセリングでは、その教師はとてども納得できないし、何の役にも立たない。そうした時には、教師はスクールカウンセラーに対して期待を裏切られた感じを抱き、一層不信感をつのらせるとともに混迷の中に投げ出される。つまり、こうした場合どれほど教師の魂に触れるコンサルテーションを実施することができるかが肝要である。コンサルテーションをスクールカウンセラーとしてどう成功させるかは、相当教職についての理解と体験的学習そして出来れば、教職経験の実感が問われる場合が少なくない。要するに、教師と教職についての理解と、教師の立場にどれほど立てるかである。すなわち、教師とコンサルタンต์としてのスクールカウンセラーがイメージを共有し共感を持ち得て、はじめて良きコンサルテーションを実施することが出来よ

う。大切なのはカウンセリング・マインドの基礎に立ったコンサルテーションである。病院臨床ではカウンセリングによる心理治療が多くのケースを占めるとしても、スクールカウンセラーとしては、現場の教師が納得し合点するまで求められるコンサルテーションのケースが、ことのほか多いのが実状ではないかと考える。従って、スクールカウンセラーがどれほど教職に対する理解と教育についての深い洞察と見識、それに併せて教育指導に対する意志と情熱を教師と共有できるかということが重要なポイントである。同様のことは保護者からの教育相談の場合でもいえる。父親・母親の機能や性的役割および家族の相互作用についてのコンサルテーションでは、スクールカウンセラーのコンサルテーションが迷い悩む父母にとっての強力な指針となる。夫婦のあり方、父親母親として子どもにどう接したらよいかのアドバイスを真剣に求めてこられた場合、父母の立場にどれだけ立ち、いかほどその気持ちを理解し、しかも的確適切なアドバイスを提供できるかどうかは重大なことである。ここではクライアント・センタード (client-centered-来談者中心) は必要としても、ノンディレクティブ (non-directive=非指示的) は通用しない。従って、父親母親して何よりも親としての自覚と認識を促す「親教育」こそコンサルテーションの真髄となる。

[5] 教育相談における尊敬と信頼

学校現場の中に、外部から学校以外の者としてのスクールカウンセラーが教育問題に関わるということは画期的なことである。主として臨床心理士がスクールカウンセラーとして教育的問題の相談任務についているわけだが、カウンセリングとコンサルテーションがスムーズに行われるに当たっては、クリアしなければならない幾多の難問が存在する。まず現場の先生方にスクールカウンセラーがどれだけ受容されているかの問題である。その理由としては次のような現場の声が聞かれる。「学校教育の経験のない者がスクールカウンセリングをスムーズにできるのか」「教師の心理と教職についての理解がどれだけ可能なのか」あるいは「臨床心理士の資格があるというだけで親の問題をクリアできるのか」「病院での断酒の治療に当たっていた臨床心理士が即学校に通用するのか」「ユング派、アドラー派、フロイト派と主張して、お互いに背を向けているではないか」。これらの声に対して「将来学校教師自身がスクールカウンセラーの任務を担える技法を身につけるべきである」といった声も聞かれる。以上の懸念に応えることは今後の学校におけるスクールカウンセラーの教育相談活動を円滑に進めるうえで必要である。スクールカウンセラーの経験からい

うと、保護者が担任と相容れない、そのために子供も情緒的に担任の教師と不一致で、不登校しているケースが少なくない。勿論、このことが不登校の主たる原因とはいえないにしても、親の側の担任教師に対する尊敬心のなさや学校に対する不信感が伺える。同様のことはスクールカウンセラーに対してもいえる。要は信頼感・尊敬心はカウンセリングとコンサルテーションには不可欠であるということである。教師のスクールカウンセラーに対する気持ちにもそういったことがいえる。スクールカウンセラーが教師に対しての外れなコンサルテーションを実施しようとする場合、教師の相談したい問題の核心に触れることはなく、相談関係は成り立たない。問題なのは、カウンセリング関係は持ち得ても、コンサルテーションはできないといったことが起こる。かといって、学校教師がスクールカウンセラーになる場合、一般の生徒指導や教科指導などのため時間的その他の、いわゆる「余裕」があるかどうかということも問題となる。学校の外部から専門的・専従のスクールカウンセラーが問題に当たるところに意義があるのであって、学校教師即スクールカウンセラーは理想であっても実現と実行は難しいのではないだろうか。また、カウンセリングやコンサルテーションが毎日だからといって効果があるわけではない。それどころか逆効果の場合すらある。つまり面接している間だけが指導ではない。ある生徒は教師に対する暴力がひどく荒れていたが、担任にすすめられてスクールカウンセラーのもとを訪れた。学校・教室・勉強等の話題には触れず、スポーツや若者文化に関する話題、スクールカウンセラー自身の中学時代の体験談などを肯定的・受容的態度でした。さらに、「学習と行動」について様々な例をあげて話した。その時の90分位のコンサルテーションがあつてから、2カ月振りにその生徒が再度訪れた際には表情も和らぎ「この2カ月色々と考え、随分気持ちが楽になり心が安定した」という言葉がその生徒から聞かれた。このケースなど、2カ月間のいわゆる「何もしていない期間」に、生徒の心の中に「大変な変化」が生じていたことになる。

おわりに

教育相談におけるカウンセリングとコンサルテーションは不可分の関係にあり、そのベースは、カウンセリング・マインドに支えられている。対象者が求めているアドバイス・解決方法を臨機応変に提供できることは、コンサルタントとして大切なことである。しかし何を求めているか分からない、ただ不安全感と不調を訴える対象者には、問題を明確化させ対処方法の具体的なイメージを共有できるほどのスクールカウンセラーと

しての力量が問われる。結局はどれだけ対象者の立場に立てるかということであるし、いかに対象者の役に立ちプラスになるか、どれほど問題を持ち悩んでいる対象者の心を理解し共感できるかである。言葉ではなく心が、そして、それが魂のレベルにまで高められ深められ、スクールカウンセラーと対象者が心底触れ合うことができる時、対象者の心は癒され、問題が解決される。

学校での教育相談においては、コンサルテーションの占める比重が非常に大きい、その基底にはカウンセリングの心が不可欠である。一方カウンセリングの場合においても常にコンサルテーションによる支援・援助が必要とされる。求められたときに、求められ期待される心の支援と援助をカウンセリングにより提供し、さらにコンサルテーションによるアドバイス・情報・技法・問題解決の的確な授与による援助をする。スクールカウンセラーの真剣さと責任に対する判定と評価は、カウンセラーとコンサルティによってなされるものである。そういった意味でのスクールカウンセラーはカウンセラーとコンサルタントの二足のわらじをはき、対象者と「問題解決の旅路に出る同行の士」といえよう。

今日の子供達の問題の多くは大人達によって引き起こされたものといえる。子供達をとりまく精神的・社会的環境は、子供達の生きるリズム・ペースを乱し、バランスと人間感覚を狂わせている。つまり、子供の問題は即大人の問題でもある。

学校における教育相談で子ども・親・教師からのものは、即効的で臨機応変の対処法を求められている。従って、対象者の相談内容の核心に触れ、対象者を心底納得させる応答が問題解決に導く。つまり学校では、カウンセリング・マインドのベースに立ったコンサルテーションが効を奏する。その意味で学校に現在派遣されているスクールカウンセラーには、臨床心理学的な知見を基礎にした「親業」「教師業」そして、あえていうならば「子ども業」に対する深い認識と理解が求められている。しかし学問的には、臨床心理学は元々治療志向的である。一方、カウンセリング心理学は予防・発達志向的であり学校心理学の方が学校教育という特定の場でのカウンセリングを目指している。従って、「学校教育」に重点を置いた学校カウンセリングこそコンサルテーションに最も近づけるのではないだろうか。本論文では、学校カウンセリングとコンサルテーションはいかにかみ合い、補い合えばよいのか、両者の共通性と相違点と効用について理論と実践の両面から考究を試みた。

〔参考文献〕

『スクール・カウンセリング技法と実際』 岡堂哲
雄・平尾美生子（編集）至文堂
1995・8・10
『スクール・カウンセリング事典』 国分康孝（編集）
石隅利紀・村上勝也・茨木都俊夫・上地安昭、他
東京書籍 1997・12・10
『カウンセリングと人間関係』 辻村英夫・又吉正治

学文社 1996
『カウンセリング心理学入門』 国分康孝 PHP 研
究所 1998
『スクールカウンセラー』 村上正治・山本和郎（編
集） ミネルヴァ書房 1998
『学校と臨床心理士』 鶴飼美昭・鶴飼啓子 ミネルヴァ
書房 1998

Counseling and Consultation

Hideo Tsujimura

Many problems are caused by adults including parents. Children are losing their sense of being a human being and are lessening the power and vitality of their living.

Their physiological rhythm, pace and balance in their lives are disturbed nowadays. When parents, teachers and children need to have School Counseling and Consultation, they are seriously seeking to obtain an effective way or find a solving method spontaneously. Consequently, the best way is the way of Consultation based on a "Counseling Mind".

Counseling Mind is Japanese English and it means the mind that has the way of counseling and self-actualization.

It is necessary that most of the school counselors can have a deep recognition and true understanding about the so called profession of "Parents", "Teachers" and also "Children". Generally speaking, Clinical Psychology takes an interest in mental illness or pathology and has the tendency to "Cure". On the other hand, Counseling Psychology is interested in prevention and development, so it aims more at education. Moreover School Psychology seeks to provide counseling in the specific field of school education.

So School Counseling based on school education is the most effective and near to Consultation. Every school counselor should know about everything concerning school, such as the school system, how teachers feel about their profession, terms used by teachers at school and so on. Experience is the best teacher.

This paper deals with the importance and effectiveness of Consultation. It is necessary for most clients and consultees to have Consultation that has a base of Counseling.

【KEY WORDS : counseling, consultation, physiological rhythm, counseling psychology, pathology, school education】